

初級日本語学習者を対象としたパソコン授業

— 「パソコン演習 A」 授業報告 —

A Class Report of “PC Practice A” for Novice Japanese Learners

野原 美和子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級学習者を対象とした「パソコン演習 A」について報告するものである。筆者は約14年間の長期にわたり担当した。2016年度前期から「パソコン演習 A」としての独立した授業がなくなるのを機に、この授業でどのような活動を行ってきたのか、本稿で総括を行う。また、今後、総合授業でパソコンを利用した学習を取り入れる際の学習方法を考える。

1. はじめに

本稿が対象とする「パソコン演習 A」は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級学習者を対象とした「集中 A クラス（以下、「集中 A」）」の一授業である。筆者は2004年度を除き、2000年度後期から2015年度後期まで、約14年間にわたり担当した。学生数は学期によって異なるが、3～12名である。学生の出身も多岐にわたり、これまで、約40の国、地域からの学生に出会った。コース開始時の日本語能力は、殆どの学生がゼロ初級レベルで、『みんなの日本語初級 I』¹の第1課から学習を始め、14～15週間、週9～11コマ（1コマ90分）の「総合 A」の授業で、『みんなの日本語初級 II』²の第50課まで終える。それ以外に、「口頭表現 A（会話）」や「文章表現 A（作文）」などの技能コマがあり、パソコン演習 A もその技能コマの一つである。週1回、全14～15コマで授業を行った。

2016年度前期に、パソコン演習 A としての独立した授業がなくなることとなった。これを機に、本稿では、パソコン演習 A でどのような活動をしてきたのか報告し、14年間の総括を行う。

2. 授業の目的

パソコン演習 A の目的は三つある。一つ目は、学生のコンピュータ・リテラシーを高め、コース修了後の専門の授業で必要となるスキルを身に付けることである。学生の多くは岐阜大学の大学院修士課程、博士課程で学ぶ学生、または、研究生である。専門の授業では、レポートや論文などを提出する際、多くはパソコンの文書作成ソフトウェアを使って作成しなければならない。また、研究発表でプレゼンテーション用ソフトウェアの使用を求められることもある。そのような状況に対応できるよう、パソコンの基本的な操作を学ぶことが目的の一つである。

但し、コースを担当し始めた当初と近年では、学生が元々持っているコンピュータ・リテラシーがかなり変化しており、それに伴い、この目的も徐々に変わってきた。当初は母語での入力さえ

ままならない学生もあり、文書の開き方、保存の仕方など、かなり基礎の説明が必要であったり、プレゼンテーション用ソフトウェアを使ったことがない学生も多く、それは何か、どのように使うのかを説明し、実践してみせなければならないこともあった。当初は文字通り、「コンピュータ・リテラシーを高める」必要があったのである。

しかし、最近はそのような基礎的なことを説明する必要は殆どなく、大抵の学生がパソコンの基本操作に精通している。元々、ある程度、コンピュータ・リテラシーがあるのである。とは言え、日本語能力が初級の学生にとっては、日本語表記の環境でパソコンを操作することはやはり簡単なことではない。画面上には初級学習では学ばないような漢字や片仮名の語彙が多く使用されており、それを理解し、操作しなければならない。母語で表記されている環境での操作なら特に問題のない学生でも、日本語でとなると、一つ一つの操作に時間がかかってしまう。当初の授業では、基本操作をマスターすることを優先し、日本語以外の言語で説明したり、質問を受けたりすることも多くあったが、近年の授業では、コンピュータ・リテラシーを“日本語で”高め、日本語表記の環境でもスムーズな操作ができるようになるということに重きを置くようになってきた。

二つ目の目的は、一つ目の目的とも関連があるが、コースの最後に行われるプレゼンテーションの準備をすることである。集中 A はコースの修了条件として、最終プレゼンテーションに参加することを義務付けている。文章表現 A と総合 A の数回と連携し、コース後半、約一ヶ月かけて準備をし、専門の授業でも役立つ発表スキルを習得する。

三つ目の目的は、コース修了後も、学生が自律して学習が続けられるようなストラテジーを紹介し、自律学習を支援することである。詳細は後述するが、例えば、インターネット上の日本語学習サイトを紹介し、実際に練習したり、日本語学習者用のオンライン辞書を紹介し、言葉の意味や読み方、漢字を調べるなど、復習やコース修了後の学習にも役立つ情報を提供し、実際に体験してもらっている。これらの知識、体験が自律学習につながり、日本語能力を向上させる一助になることを目指している。

3. 授業実践

では、実際にどのような授業を行ってきたのか、授業内容の概要を述べる。学生は学期ごとに変わるので、授業の内容も自ずと変わってくる。ここでは、先ず、2015年度後期の授業を例に、授業内容の概要を述べる。次に、これまでに行った活動で、2015年度後期には行うことができなかったものについて紹介する。

3.1 2015年度後期の授業実践

3.1.1 授業内容

2015年度後期は全14回授業を行った。場所は岐阜大学総合情報メディアセンターの一室である。使用した OS は Windows 7、また、授業で使った文書作成ソフトウェアは Microsoft Word 2010（以下、「ワード」）、プレゼンテーション用ソフトウェアは Microsoft PowerPoint 2010（以下、「パワーポイント」）である。

学生は6名³、出身は中国3名、インドネシア、バングラデシュ、内モンゴルが各1名である。

内モンゴルの学生は男性で、他5名は女性である。

以下、実際に行った授業内容を示す。

表1. 2015年度後期の授業内容

回	授業内容	宿題
1	1. パソコンの各部分の名称と授業でよく使う言葉の確認 2. パソコンの起動から終了までの一連の操作の確認 3. 平仮名の入力	平仮名の入力*
2	1. 平仮名入力の復習 2. 片仮名の入力	片仮名の入力*
3	1. 片仮名入力の復習 2. 漢字の入力 3. 記号の入力 4. 単文の入力 5. 作文「自己紹介」**を自己訂正しながら入力（第2稿作成）	「自己紹介」第2稿の作成*
4	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級I』L15, 16の新出語彙） 2. 「自己紹介」第2稿の入力データを使用したページ設定の練習 3. 「自己紹介」第2稿の入力データを自己訂正（第3稿作成） 4. 各自、第3稿を基に「自己紹介」の発表練習 ※翌日の文章表現Aで発表	「自己紹介」第3稿で発表練習
5	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級I』L20, 21の新出語彙） 2. 作文「休みの日」第2稿入力データ***のページ設定 3. ルビ機能の紹介 4. 「休みの日」第2稿入力データの漢字にルビを付ける 5. 「休みの日」第2稿入力データを自己訂正（第3稿作成） 6. パワーポイントのスライドの作り方を説明 7. 「休みの日」のパワーポイントを作成	「休みの日」第3稿の作成とパワーポイントの作成
6	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級II』L26, 27の新出語彙） 2. 一人の学生の作文「私の町」第1稿****について、全員でピア・レスポンス 3. ピア・レスポンスを踏まえ、各自、第1稿入力データ*****を自己訂正（第2稿作成） ※翌日の文章表現Aで引き続き作成	
7	1. 作文「私の町」第2稿入力データを自己訂正（第3稿作成） 2. 「私の町」のパワーポイントを作成	「私の町」第3稿とパワーポイントの作成*
8	1. 「私の町」のパワーポイントを完成させる 2. 「私の町」の発表練習 3. 「私の町」発表（2名発表）※他4名は翌日の文章表現Aで発表	「私の町」パワーポイントの完成*、発表練習*
9	1. 作文「今年の三大ニュース」第1稿入力データ*****を自己訂正（第2稿作成） 2. 「今年の三大ニュース」のパワーポイントの作成 ※翌日の文章表現Aで発表	「今年の三大ニュース」第2稿とパワーポイントの作成*

10	最終プレゼンテーションの準備： スピーチ「今までで一番〇〇こと」の第1稿を作成しながら入力	第1稿の作成*
11	最終プレゼンテーションの準備：全員でピア・レスポンス（2名分） ※他4名は当日の総合Aと翌日の文章表現Aで行った	
12	最終プレゼンテーションの準備：スピーチ原稿を完成させる	スピーチ原稿を完成させる*
13	最終プレゼンテーションの準備： 1. スピーチ原稿を完成させる 2. パワーポイントを作成する	パワーポイントを作成する
14	最終プレゼンテーション	

* 授業中の課題を終了できなかった学生のみ。

** 文章表現Aで作成した作文。教師がチェックし、訂正箇所を明示している。

*** 文章表現Aで作文を作成。教師がチェックし、訂正箇所を明示している。それを宿題で自己訂正しながら入力し、データを授業までにメールに添付して送付してきている。

**** 文章表現Aで導入。第1稿を入力し、データを授業までにメールに添付して教師に送付してきている。教師はチェックしていない。

***** 文章表現Aで導入。第1稿を入力し、データを授業までにメールに添付して教師に送付してきている。添付書類を教師がチェックし、訂正箇所を明示している。

全14回の授業は大きく三つの段階に分けることができる。以下で、各段階の内容を述べる。

3.1.2 第1段階：基本操作と日本語入力の練習

第1段階は基本操作の確認と日本語入力の練習である。2015年度後期では、第1回から第3回の授業に当たる（学期によっては、2回で終わることもある）。教材は『留学生のためのプロジェクトワーク:簡易・MS Word 2010版』⁴を使用した。第1回でパソコンの各部分の名称（「画面」「スイッチ」「キーボード」など）やキーボードのキーの名称（「スペースキー」「エンターキー」「半角/全角キー」など）、また、操作を指示する際に教師がよく使用する表現（「開きます/開いてください」「インプットします」「セーブします」など）を確認する。その後、パソコンの起動、ワードでの文書の作成、保存の仕方を説明し、パソコンを終了させるまでの一連の操作を確認する。

そして、日本語入力で重要な「半角/全角キー」の機能、画面上の「言語バー」の表示内容を説明後、平仮名の入力練習を行う。入力はローマ字入力で行う。母語での入力はできても、日本語を入力するのは初めての学生が多い。また、文字をローマ字で考えることにも慣れていないため、ローマ字表記の確認の意味も含め、単音の入力から始める。日本語の表記で使われる音はここで全て入力をする。この段階では片仮名入力の説明はしていないので、「てい」「ふい」「でゅ」など、片仮名の語彙でしか使われないようなものも平仮名で入力する。そのため、ここである程度の時間が必要になる。単音の入力後、既習語彙で平仮名の入力練習をする。

第2回の授業では片仮名、第3回では漢字の入力練習をする。スペースキー、シフトキーと矢印キーの使い方を説明し、既習語彙の入力練習をする。片仮名の入力では、入力方法自体は平仮名と変わらないので特に問題はないのだが、コースが始まって、まだ間もない頃なので、練習問題の片仮名を読めない学生もあり、人によって、かなり入力のスピードが違ってくる。速い学生

には、追加の課題を与えている。また、漢字の入力では、間違っただけの入力し、正しい漢字に変換できないことが多々ある。教科書や辞書で読み方を調べる学生もおり、言葉をしっかり覚えようという意識にもつながっているようである。

学生がなかなか入力できなかつたり、入力方法を忘れやすい文字は、「を」「づ」、拗音、片仮名の特殊音、促音である。教材の中でこれらを特に取り出した問題もあり、練習をしているが、コース後半になっても、どのように入力するのか聞いてくる学生も時々いる。その都度、教材で確認し、覚えるよう促している。

第3回では、『』「」～（）⇒など、記号の入力練習もする。ここまでで、一通り、入力に必要な練習は終わる。その後は入力のスピードを上げる練習になる。速く、間違いが少ない入力方法を紹介し、単文入力、長文入力の練習を行う。

3.1.3 第2段階：日本語入力練習と発表練習

第2段階では日本語での入力練習を引き続き行いながら、文章表現Aと緊密に連携し、発表の練習をする。2015年度後期では、第4回から第9回の授業に当たる。日本語入力の練習にはタイピング練習を取り入れている。使用したソフトウェアは「Flash Typist ver 1.28」というフリーソフトウェアである。このソフトウェアは問題を自作することができる。事前に『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』の新出語彙で筆者が問題を作成し⁵、総合Aの進度に合わせて、授業当日や前日に習った課の言葉で入力練習をした。問題が終了すると「タイプ速度」「タイプ精度」など、詳細なデータが表示される。それを各自記録用紙に記録し、上達度が確認できるようにした。結果が数字で表れるので、より精度を高めよう、スピードを上げようとする姿勢が見られた。また、問題に出てくる言葉の意味がわからない時は辞書等で調べており、良い復習になっていたようである。自習ができるように、問題のデータは50課分全て最初に渡している。特に文字認識が弱い学生や入力が遅い学生には、授業外でも練習することを推奨している。

発表練習は、この学期では、「自己紹介」「休みの日」「私の町」「今年の三大ニュース」の4つのテーマで行った。まず、文章表現Aで作文を書き、それをパソコン演習の授業内で入力、または、宿題で入力する。提出された作文や入力データを教師がチェックし⁶、それを基に、各自、自己訂正、推敲をし、改稿する。推敲作業の際には、学生の推敲能力の向上を図るため、「ピア・レスポンス」を行っている。「ピア・レスポンス」とは、作文の推敲活動において、学習者同士が書き手・読み手の立場を交換しながら作文内容を検討する活動のことである（池田・館岡2007：71）。読み手の立場を考えた、わかりやすい文章が書けるようになるのではないかと考え、この手法を取り入れている。ピア・レスポンスは通常、ペア、または、少人数のグループで行うものであるが、この段階では、ピア・レスポンスに慣れるため、クラス全員で一人の作文について行っている。

作文の入力データは、ページ設定や文字のフォントスタイル、サイズの変更など、原稿の体裁を整える練習や、漢字にルビを付ける練習にも使用する。体裁の整え方は他の言語のワードでも大体同じ仕様なのでスムーズにできるが、ルビ機能は日本語版に特徴的な機能であり、説明、練習が必要になる。最近のワードは自動でふりがなが表示されるので、漢字の読みが苦手な学生には、実用的で人気が高い機能である。ただ、100%正しく表示されるわけではないので、ワードを過信せず、必ず自分でチェックするよう、指導している。

作文の完成後、パワーポイントを作成し、発表する。2015年度後期は、一つ目の「自己紹介」以外の三つの作文でパワーポイントを作成した。色使いやレイアウトなど、見やすさを考えることはもちろんだが、作文の内容に沿ったスライドを作成すること、意味のないアニメーションを使用しないなど、発表を聞く人の理解を妨げないスライド作成を心がけ、話を聞きながら見た時にわかりやすいスライドかどうかを考えるよう指導した。また、インターネット上の写真や画像を使用する場合は、その参照元の URL を必ず明示するなど、情報の扱い方も指導した。パワーポイントの完成後、パワーポイントを操作しながら、発表をする。発表時の態度や声の大きさ、聞き手とのアイコンタクトの取り方、パワーポイントのスライドを切り替えるタイミングなどの指導を行っている。

3.1.4 第3段階：最終プレゼンテーションの準備

第3段階はコースの最後に行われる最終プレゼンテーションに向けた準備である。2015年度後期では、第10回から第13回の授業に当たる。プレゼンテーションの時間は質疑応答も含め、一人10～15分程度である。テーマは学期によって異なる。以前には、学生が自分でテーマを決め、アンケートやインタビューをし、データを取って発表したこともあった⁷が、近年は、「今までで一番〇〇こと（楽しかったこと・大変だったこと・びっくりしたこと、等）」「私の国の〇〇（観光地・行事・有名人、等）」が多い。この学期のテーマは「今までで一番〇〇こと」であった。

まず、各自タイトルを決め、スピーチ原稿の作成を行う。自分の発表したい内容と言語レベルが一致せず、辞書に頼りがちになるが、辞書で調べた言葉は他の学生には伝わらないことが多い。聞き手がわかるように、既習の言葉や表現を使うよう、指導した。文章表現 A と連携し、原稿は何度も推敲、改稿を繰り返す。その際に、ピア・レスポンスを取り入れている。この学期は時間的な制約があり、学生数も少なかったため、クラス全員でのピア・レスポンスを学生一人につき1回だけ行った。学期によってはクラス全員でピア・レスポンスをし、その後、ペアでピア・レスポンスをする、場合によってはペア活動を2回するなど、数回、ピア・レスポンスを取り入れることもあった⁸。

スピーチ原稿が大体出来上がった頃から、パワーポイントの作成を始める。第2段階の発表練習の時と同様、スピーチの内容に沿ったスライド作成を心がけ、必要な写真や画像を準備したり、図表の作成を進める。スピーチ原稿の内容変更に伴い、パワーポイントも変わってくるので、随時、確認を行っている。

スピーチ原稿が完成したら、まず、声に出して読む練習をする。発音に注意しながら、スピーチ原稿を読む。各自、ICレコーダーに練習の声を録音し、自分で聞いて聞きにくい所や、話しにくい所を重点的に繰り返し練習する。また、ペアになってお互いが読むのを聞き、アドバイスをし合ったり、総合 A と数回連携して、学生一人につき30分ほど時間を取り、教師と読む練習をする。最終段階で、発表を「見せる」練習をする。パワーポイントを使い、他の学生が聞き手となって、実際の発表と同じような状況で練習をする。パワーポイントのスライドを切り替えるタイミングやアイコンタクトの取り方、発表態度などに注意しながら練習を行う。他の学生や教師から質問を受け、質疑応答の練習もする。できるだけスピーチを覚え、聞き手を見ながら発表できるように、繰り返し練習を行っている。

この学期では最終プレゼンテーションがちょうどパソコン演習 A の時間（第14回）に当たっ

たが、他の授業の時間に行われることもある。発表は他のコースの学生や日本人学生、専門の授業の指導教員、留学生別科の教員など、毎回、30人位の方が見に来てくださる。集中 A での日本語学習の集大成でもあり、発表後は、毎回、学生の満足気な顔が見られる。

3.2 その他の活動実践

3.1節では2015年度後期の授業で行った活動を中心に述べたが、これまでには、その他にも様々な活動を行ってきた。ここでは代表的な活動について紹介する。

3.2.1 視聴覚教材を利用した活動

日本語入力の練習として、視聴覚教材を見て、内容の説明や与えられた質問の答えを入力する活動をした。学期によって、3、4回取り入れた時もあった。

主に使用したのは『ヤンさんと日本の人々』『新日本語の基礎Ⅰ復習ビデオ』である。『ヤンさんと日本の人々』は、来日した外国人のヤンさんと日本人の友人家族、会社の人との交流を描いたビデオである。『新日本語の基礎Ⅰ復習ビデオ』は『新日本語の基礎Ⅰ』シリーズ（スリーエーネットワーク）の視聴覚教材で、既習の言葉、文型を使用しながら、日本の会社での出来事、人間関係を描いている。どちらも初級学習者でもわかりやすい日本語を使用しているだけでなく、一話の時間が長すぎず、台詞や演技が自然で、一般のドラマを見ているように感じる。学生もビデオの内容に興味を持ち、楽しそうに視聴していた。

総合 A の進度に合わせ、視聴する回を決定した。内容を詳細に説明するのは初級の学生にとって難しいことではあったが、既習文型を使いながら積極的に取り組んでいた。

3.2.2 自律学習を支援する活動

2章で述べたように、パソコン演習の目的の一つには学生の自律学習の支援がある。タイピングソフトウェア「Flash Typist ver 1.28」で日本語入力の練習を推奨することもその一つだが、その他に、インターネット上の日本語学習サイトを紹介し、実際にどのような練習ができるか体験してもらうことで、自律学習を促している。残念ながら、2015年度後期にはその時間を取ることができなかったが、殆どの学期で扱っている活動である。

日本語学習ができるサイトは多くあるが、近年の授業では「オンライン日本語練習」(<http://www.nihonmura.net/jp>)というサイトを利用している。ここでは、「ひらがな・カタカナの入力練習」「動詞の活用形」「漢字の読み方」「序数」の練習ができる。また、上級者向けの文法表現の紹介をしている。授業で主に使用しているのは「動詞の活用形」「序数」のページである。ある程度、総合 A で動詞の活用を学んだ後に紹介している。「動詞の活用形」のページでは、出題された動詞をテ形やナイ形、辞書形など、指定された形に活用させて入力する。「序数」のページでは、年月日の言い方、時間や分の言い方などを入力する。促音や長音で間違えることが多く、それらを意識した活動ができる。なかなか満点を取ることができず、教科書を見直ししながら入力している学生も多く見られる。良い復習になると学生からも好評を得ている活動である。

日本語の学習サイトを紹介する以外に、自律学習の支援として、オンライン辞書の紹介と練習も行っている。近年紹介しているのは「jisho」(<http://jisho.org>)というサイトである。これは日本語-英語のオンライン辞書で、英語の説明しかないが、多くの用例が載っており、用法がわ

かりやすい。日本語学習者用に漢字の読み方があるのも推奨する理由の一つである。yahoo や google、excite などの翻訳、オンライン辞書も紹介しているが、日本語母語話者が一般的に使うオンライン辞書では、言葉を調べても漢字の読み方がわからず、意味もわかりにくいという学生が多い。英語がわからない学生には薦められないが、「jisho」はその点をカバーできるオンライン辞書と言える。

授業では、紹介したオンライン辞書を使って言葉の意味を調べる練習や、長文を読み、その長文内の言葉や表現、漢字の読み方を調べる練習を行った。また、発展練習として、その長文と同じテーマで作文を書くという課題を与えたこともある。

3.2.3 実際のイベント情報を利用した活動

ワードで、インデントやタブを設定し、見栄えの良い、体裁が整った書類を作成する練習として、実際のイベント情報を利用した活動を取り入れた。例えば、岐阜市内のある高校で、高校生と科学に関して英語で交流できる留学生を募集する貼り紙があった。それを利用し、同じようなレイアウト、フォントのチラシを作成する活動を行った。また、学生に何かイベントを考えてもらい、参加者を募集する同様のチラシ作成を行った。場所や日時、募集人数などの書き出しを描えるなど、見た目をきれいにすることや、注目してもらいたい部分を強調し、目に付きやすくするレイアウトを考えたり、読み手が理解しやすい文章、内容を意識して作成するよう指導した。架空の内容もあったが、クリスマス・パーティーや忘年会、旅行の参加者を募集する内容など、実際に自分が企画したい活動の内容で作成する学生が多く、チラシ作成後、どのイベントが一番おもしろそうで参加してみたいかなど、自然と話が広がり、興味を持って取り組めた。

4. 学生の反応と今後への提言

集中 A では、コースの最後の授業で反省会を行っている。そこでは、学生にアンケートに答えてもらいながら、口頭で直接意見を聞いている。アンケートにはパソコン演習についての項目もある。近年の学生の反応をいくつか紹介したい⁹。

- ・入力練習は大切だ。大学の授業やゼミで必要だが、全然日本語の入力の仕方を知らなかったの
で、練習できて良かった。
- ・タイピングソフトを使った練習は良かった。スピードが速いので、日本語を見て日本語で考え
られるようになるから。『みんなの日本語』の言葉を使っているのも良かった。
- ・入力練習はもっとあったほうが良い（宿題でも良い。学んだ文法項目の入力など）。プレゼン
の練習、パワーポイントの作り方ももう少し増やしても良い。
- ・おもしろかった。とても良かった。この授業は大切だ。
- ・時間が短い。もっと多くしても良い。
- ・発表はしたほうが良い。大学の授業でもするし、いい練習になる。
- ・パワーポイントの作り方をやってほしい。

このように、概ね、肯定的な反応が多かった。専門の授業のために、日本語での入力練習やパ

ワーポイントの作成練習、プレゼンテーションの練習は重要で、もっと練習が必要だと考える学生が多いことがわかる。

しかし、一方で、以下のような意見もあった。

- ・簡単だった。もっと難しいことをしても良い。
- ・パワーポイントは前に習ったことがあるので、おもしろくなかった。
- ・初めて日本語を勉強する人には良いと思う。

やはり、学生のコンピュータ・リテラシーによって、意見が違ってくることがわかる。学生によって課題を変えたり、追加の課題を与えたりしてはいたが、物足りなさを感じる学生もいたようだ。

2016年度前期からパソコン演習が総合 A に組み込まれるが、上記の学生の反応を考えると、日本語入力の練習は継続的に取り入れると良いと思われる。総合 A で文字の導入が終わった頃から始め、文章表現 A の作文を入力して提出するなど、ワードを使った課題を出したり、宿題としてタイピング練習をしてくるようにしても良い。タイピング練習は、文字認識が弱い学生の能力を向上させる手段としても有効だと思われる。文字認識が弱い学生は教科書や授業での板書の理解に時間がかかり、コースの初期から授業についていけなくなることが往々にしてある。タイピング練習は練習すればスコアが上がっていくので、楽しみながら練習できる。繰り返し練習することで、文字を早く覚えることができるであろう。練習問題を英語や中国語などを見て日本語を入力するように作成すれば、言葉を覚える練習にもなる。反省会のアンケートでは、「日本語の勉強は覚えなければいけない言葉が多くて大変だ」という意見があった。言葉を覚えるのに苦労している学生は多いので、その助けになるのではないかと思う。

また、日本語学習サイトを利用して学習する時間も取れると良い。総合 A の授業の進度に合わせ、教師が指示する練習をしても良いし、学生が自分に必要だと思う練習をしても良い。後者は学生が主体的に学ぶ環境を与えることになり、コース後の自律学習を支援することにもなる。日々、新しいサイトやサービスが生まれ、良い練習ができる場も多くなっている。それらを実際にやってみることは、学生の学習に対する動機づけを高めるのではないだろうか。

パワーポイントの作成やプレゼンテーションの練習も多くの学生が重要だと考えている。2016年度前期は最終プレゼンテーションを行わないため、3.14項で紹介したように、長い期間をかけて準備や発表練習を行うことはない。しかし、学生の意見を考えると、何らかの形で発表練習はした方が良い。これまででも、文章表現 A で書いた作文を基にパワーポイントを作成し、発表してきたが、小規模でも、この活動は続けると良いと思う。

5. おわりに

2000年にパソコン演習 A を担当した当初のことを振り返ると、この15年間で、学生を取り巻く環境は大きく変わった。当初は、母国でパソコンに触れる機会が殆どなく、入力には人差し指でポツポツとしかできない学生が必ずクラスに数人はいた。今では大半の学生が自分のパソコンを持っており、母語での入力に問題がある者は殆どいない。生活の中でパソコンを使うことが特別

なことではなくなり、高いコンピュータ・リテラシーを既に持っている人が多くなった。パソコン演習 A の当初の目的が「コンピュータ・リテラシーを高めること」であったことを考えると、この授業が単独で行われなくなるのは時代の趨勢かもしれない。

しかし、最初の入力の手ほどきは必要で、継続的に日本語の入力練習をしたいと言う学生は多い。また、パワーポイントを使用した発表練習も、専門の授業を考えると必要であろう。今後も有用なインターネットのサイトやサービスが多く出てくるであろうし、それらを利用することは学生の益にもなると思われる。

初級学習者が日本語表記のパソコンを使って日本語の文章を作成したり、パワーポイントを操作して発表することは非常に困難なことである。パソコン演習の意義は、様々な練習を通してパソコンや発表のスキルを身に付け、初級レベルの日本語力でも日本語で発表できる、文章が入力できる、課題をこなせるという達成感や自信を得られるようになることであると考えられる。「パソコン演習」という名前はなくなるが、総合 A の中でパソコンを利用した授業、自律学習の支援を今後も続け、学生がそのような実感を得られるようにサポートしていけたら良いと思う。

注

- 1 2015年度後期は第2版を使用した。それ以前は全て初版を使用している。
- 2 同上。
- 3 コース終了時の学生数である。開始時は9名であったが、コースの早い段階で、3名は他のクラスへ移動した。最初の数回は6名以上で授業を行った。
- 4 『留学生のためのプロジェクトワーク』（宮谷・野原 2005）を、使用する OS、Microsoft Office に合わせて改訂し、授業で扱わない活動を削除した簡易版の教材である。
- 5 2015年度後期は総合 A で『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 II』の第2版を使用したため、それに合わせ、問題を変更している。
- 6 教師による作文のチェックは、文法が誤っている箇所や誤字脱字の指摘と内容に関するコメントで、訂正例は示していない。後述の「ピア・レスポンス」をする場合は、学生による推敲活動を妨げないよう、内容に関するコメントはしていない。
- 7 『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2001秋期～2002春期』（岐阜大学留学生センター編 2003）、『同、2002秋期～2003春期』を参照のこと。
- 8 野原・吉成（2012）で、集中 A の授業で行ったペアによるピア・レスポンスの活動を紹介している。一例として参照していただきたい。
- 9 学生がアンケートに書いたり、反省会で述べた意見を担当教師がまとめて文章にしたものである。学生が表現したそのままの言葉ではない。

参考文献等

- 池田 玲子・館岡 洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 海外技術者研修協会監修（2000）『新日本語の基礎 I 復習ビデオ』スリーエーネットワーク
- 岐阜大学留学生センター編（2003）『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2001秋期～2002春期』岐阜大学留学生センター

- 岐阜大学留学生センター編 (2003) 『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2002秋期～2003春期』岐阜大学留学生センター
- 国際交流基金編 (1983) 『ヤンさんと日本の人々 国際交流基金ビデオ教材』国際交流基金
- スリーエーネットワーク編著 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (2012) 『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- 野原 美和子・吉成 祐子 (2012) 「初級日本語学習者によるピア・レスポンスの実態と効果 -- 読み手が学習者と教師の場合の比較」『岐阜大学留学生センター紀要2014』 pp. 39-55
- 宮谷 敦美・野原 美和子 (2005) 『留学生のためのプロジェクトワーク』岐阜大学留学生センター

参考ウェブサイト (2016年7月現在)

- オンライン日本語練習 Online Japanese Practice powered by NIHON MURA (<http://www.nihonmura.net/jp>)
- jisho (<http://jisho.org>)
- Web Frontier (<http://www.w-frontier.com/index.html>) 「Flash Typist ver 1.28」

